

調 査

—今、改めて考える信用金庫の源流—

報徳思想を踏まえた独自の取組みと二宮金次郎像の全国への普及 ～さがみ信用金庫と愛知県岡崎地区の石工業～

信金中央金庫 地域・中小企業研究所主任研究員

中西 雅明

(キーワード) 信用金庫、二宮尊徳、報徳思想、さがみ信用金庫、二宮金次郎像

(視 点)

日本の信用金庫の源流を紐解くと、鎌倉時代に始まり江戸時代に普及した「頼母子講・無尽講」や江戸時代後期の農民指導者である大原幽学の「先祖株組合」など、いくつかのルーツがあるとされるが、そのなかでも後世に多大なる影響を与えたのは、やはり二宮尊徳（二宮金次郎）であろう。信金中金月報2016年8月増刊号（2016年8月）「—今、改めて考える信用金庫の源流—二宮尊徳がつくりあげた報徳思想の実践～掛川信用金庫と報徳二宮神社」では、日本における協同組織金融機関の成り立ちの一つとされる五常講ごじょうこうを設立した二宮尊徳の歴史、特徴などについて概説した。

そこで本稿では、報徳思想の実践として、二宮尊徳の生まれ故郷である神奈川県小田原地区で設立されたさがみ信用金庫（源流は大正時代に設立された「報徳購買組合」と「小田原信用購買組合」）を取り上げるとともに、日本各地の小学校に建立されている二宮金次郎の石像の普及に大きく貢献した愛知県岡崎地区の石工業の取組みにも光をあてて、信用金庫の源流と二宮尊徳について今改めて考えていくこととしたい。

(要 旨)

- さがみ信用金庫は、1923年（大正12年）の関東大震災で神奈川県小田原地区が壊滅的な被害に遭った際に、中小企業や庶民への復興資金需要などに対して設立された「小田原信用購買組合」が始まりである。その後、「小田原報徳信用組合」、「小田原信用金庫」などを経て、現在の「さがみ信用金庫」に至る。
- 小田原地区では、明治時代から二宮尊徳の四大高弟の一人である福住正兄ふくずみまさえを中心として信用組合設立の機運が高まっていた。1892年（明治25年）には福住が箱根の福住旅館で「信用組合法研究会」を開催し、年内に小田原や掛川などで信用組合を創設することが計画されたが、その3か月後に福住が病没してしまい、明治時代の小田原地区での信用組合誕生は幻となってしまふ。
- 今日のような薪を背負いながら本を読んで歩く二宮金次郎像が全国に普及するに至った要因は、明治天皇がその姿の二宮金次郎像を購入し、時々机の上に飾られていたこととされる。その後、愛知県岡崎地区の石工業者が様々な活動を行い、二宮金次郎の石像は全国の小学校などに普及した。

はじめに

2016年度、信金中金月報2016年8月増刊号(2016年8月)「一今、改めて考える信用金庫の源流—二宮尊徳がつくりあげた報徳思想の実践—掛川信用金庫と報徳二宮神社～」を発売した。そのなかでは、信用金庫の源流の一つとされる二宮尊徳(1787~1856年)がつくりあげた相互扶助の金融(協同組合)の仕組み「^{こじょうこう}五常講」と報徳思想についてふれた。また、日本で最初に設立された掛川信用金庫や報徳二宮神社についても取り上げ、報徳思

想と信用金庫の成り立ちについて振り返った(図表1)。

そこで本稿では、報徳思想の実践として、二宮尊徳の生まれ故郷である神奈川県小田原地区で設立されたさがみ信用金庫(源流は大正時代に設立された「報徳購買組合」と「小田原信用購買組合」)を取り上げるとともに、日本各地の小学校に建立されている二宮金次郎の石像の普及に大きく貢献した愛知県岡崎地区の石工業の取組みにも光をあてて、信用金庫の源流と二宮尊徳について今改めて考えていくこととしたい。

図表1 協同組織金融機関設立のあらまし(日本・欧米)

年	主な出来事	日本	欧米
1760	イギリス産業革命		
1814		二宮尊徳、小田原藩家老服部家で困窮武士を対象とした金融互助組織「五常講」を設立	
1844			イギリスで「ロッチデール公正先駆者組合」創設
1848	ドイツ産業革命		
1850			ドイツで、シュルツェ・デーリチュが「市街地信用組合」設立
1862			ドイツで、ライファイゼンが「農村信用組合」を設立
1864			イタリアで、ルツァッティが「庶民銀行」を設立
1868	明治維新		
1879		二宮尊徳の高弟岡田良一郎が「勸業資金積立組合(現在の掛川信用金庫)」を設立	
1891		品川弥二郎・平田東助が「信用組合法案」提出(議会解散により審議未了)	
1892		二宮尊徳の四大高弟の一人 福住正兄や岡田良一郎などが箱根の福住旅館に集い、「信用組合法研究会」を開催	
1895			イギリスで「国際協同組合同盟(ICA)」結成
1900		「産業組合法」公布、施行	カナダで、デジャルダンが「庶民金庫(ケース・ポピュレール)」を設立
1909			アメリカで、デジャルダンが「信用組合(クレジット・ユニオン)」を設立

(備考) シュルツェ・デーリチュ著 東信協研究センター訳編『シュルツェの庶民銀行論』日本経済評論社(1993年10月)および村本 孜『信用金庫論—制度論としての整理』きんざい(2015年2月)より信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

1. さがみ信用金庫—小田原信用購買組合・小田原報徳信用組合からの系譜—

本章では、さがみ信用金庫の設立の経緯について振り返るとともに、設立について報徳思想がいかに活かされたかについて考えてみたい。

(1) さがみ信用金庫設立の経緯

さがみ信用金庫の前身は、1925年（大正14年）設立の「小田原信用購買組合」であるが、1926年（大正15年）に合併した「報徳購買組合」も関連があるため、ここでふれておく（図表2）。

大正時代に入り、小田原地区の庶民は「小

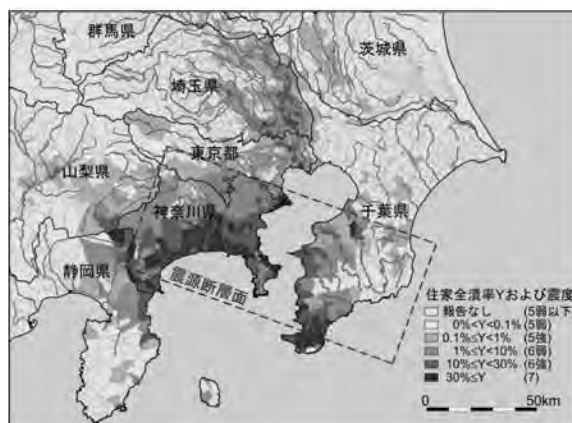
図表2 さがみ信用金庫



信用金庫の概要	
信用金庫名	さがみ信用金庫
理事長	秋葉 勝彦
所在地	神奈川県小田原市浜町1丁目4番28号
創立	1925年（大正14年）10月
預金積金	671,507百万円
貸出金	306,775百万円
常勤役員数	600人

（備考）信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成（計数は2016年3月末現在）

図表3 関東大震災における各地の震度



（出典）内閣府 広報「ぼうさい」(No.39) pp20-21 (2007年5月)
http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunokeishou/pdf/kouhou039_20-21.pdf

田原相場」と呼ばれる物価高に悩まされていた。これは、東海道線小田原駅開設に伴う地価の高騰とその動きに便乗した米や野菜などの食料品を中心とした値上げであった。

こうした状況に対し、小田原の庶民に相應の価格で食料品などを販売することなどを目指し、報徳二宮神社の宮司である草山惇造や報徳活動家の人々によって、1920年（大正9年）に「報徳購買組合」が設立された。この組織は、現在でいう生活協同組合に似た組織であり、まさに信用金庫の源流の一つであるイギリスの「ロッチデール公正先駆者組合」が設立された経緯^(注1)と非常に似通っているといえよう。

1923年（大正12年）、関東大震災が発生し、震源地に近い相模川低地および酒匂川低地は震度7の激震に襲われ、小田原地区は壊滅的な被害に遭った（図表3）。関東大震災といえば、東京や横浜の被害がクローズアッ

（注）1. 信金中金月報2015年8月増刊号『今、改めて考える信用金庫の源流「一人は万人のために、万人は一人のために」』（2015年8月）P76

プされがちだが、実は震源地に近かった小田原地区も大きな被害が発生していた。こうした状況の中、小田原地区の中小企業や庶民に対する復興資金の需要は大きく高まっていたが、多くの銀行は復興資金の融資に多額の担保を要求していたため、担保がない場合、融資を受けるのが極めて困難であった。

そこで、庶民を対象にした金融機関の設立が求められ、先祖は二宮尊徳とも親交があったとされる一藤木喜十郎^(注2)が設立申請人代表となり、1924年(大正13年)4月「有限責任小田原信用購買組合」の設立認可申請を当時の県知事宛に行った。しかしながら、申請後、関東大震災で崩壊してしまった堤防の復旧工事の指揮などをしていた一藤木は、工事中に負傷し、その怪我がもとで敗血症を起こし、死去してしまう。こうした困難を伴いながらも、1925年(大正14年)10月に組合長松岡彰吉のもと「小田原信用購買組合」は営業を開始した。

同年11月には、前述の「報徳購買組合」から合併の申し入れがあった。組合長松岡彰吉と報徳購買組合長草山惇造はもともと昵懇の間柄であったうえに、両組合の営業地区はほとんど重複していたため、合併話はスムーズに進んだ。1926年(大正15年、昭和元年)3月には、認可が下り、名称と組織を大幅に変更し、「小田原報徳信用組合」として新たなスタートを切ることとなった。ちなみに、

この合併により預金残高は約7倍(2,850円→19,850円)になるとともに、出資金残高も倍増し、経営基盤の安定が図られた。

その後、1943年(昭和18年)市街地信用組合法の施行に伴い「小田原信用組合」に名称・組織変更、1951年(昭和26年)信用金庫法施行にもとづき翌年4月に「小田原信用金庫」、1992年(平成4年)に足柄信用金庫との合併を経て「さがみ信用金庫」となり、現在に至る。

(2) 明治時代からみられた設立の機運

さがみ信用金庫の前身は、前述のとおり、1925年(大正14年)に始まった「小田原信用購買組合」であるが、実は明治時代に小田原地区で信用組合設立の機運が高まっていた。

二宮尊徳の四大高弟(富田高慶、齋藤高行、福住正兄、岡田良一郎)のうち、福住正兄が小田原には大きな影響を与えている。1824年(文政7年)相模国方岡村(現：神奈川県平塚市片岡)の名主大澤市左衛門の5男として生まれ、22歳のときに二宮尊徳に弟子入りした。二宮尊徳の身辺の世話や巡回指導に随行し、のちに「二宮翁夜話^(注3)」を執筆している。

福住は、27歳のときに、二宮尊徳のもとを離れ、箱根湯本温泉 福住旅館の養子となつて、旅館業を営みつつ、小田原報徳社の活動に携わり、この地方の報徳運動を長く指導し

(注)2. 一藤木家は代々小田原の鳶職人であり、当時は本職の鳶の頭のほか、森有礼の別邸を譲り受け「藤館」という旅館も経営していた。

3. この書物は、多忙極まりない二宮尊徳が夕食時に弟子から農村復興などの事業だけでなく弟子の身辺の相談にまで応じており、夕食時のコミュニケーションによって弟子を育てていった様子などが書かれている。また、二宮尊徳7代目子孫の中桐万里子氏などが解説本を出版している。

図表4 明治時代の福住旅館（左）と福住正兄（右）



(出典) 箱根町立郷土資料館『国重要文化財指定記念 福住旅館金泉楼・萬翠楼—明治の息吹を今に伝える建築と書画』(2003年9月)

た。“村おこし”の先駆者としても知られており、小田原馬車鉄道（国府津—湯本間）を敷設したり、名所旧跡の保存に努めるなど、観光地「箱根」の整備・近代化に貢献した。

なお、小田原報徳社は1843年（天保14年）に設立されており、掛川にある大日本報徳社（1911年、明治44年発足、前身は1875年に設立された遠江報徳社）よりも長い歴史がある。特に、1891年（明治24年）11月に「信用組合法案」が品川弥二郎内務大臣と平田東助法制局長らによって提出されたが、法案提出にあたって、品川らは信用組合に似た仕組みをもつ「報徳社」に着目し、その年の夏に平田東助は福住と箱根の福住旅館で会談している。

その後、「信用組合法案」は議会解散 審議未了により廃案となってしまうが、翌1892年（明治25年）2月に報徳社の長老であった福住は、箱根の福住旅館に三河・駿河・遠江・伊豆・小田原など各地の報徳社の面々を集め、「信用組合法研究会」を開催した（図表4）。（ちなみに、福住のほうが岡田良一郎よりも15歳ぐらい年上である。）この集いには130人以上が出席し、年内に小田原・掛川

などで信用組合を創設しようという機運が高まった。しかしながら、福住はこの3か月後の5月に69歳で病没してしまい、小田原地方の信用組合誕生は幻となってしまった。

同年7月には、静岡県の掛川に、日本最初の信用組合となる「掛川信用組合」が岡田良一郎によって設立され、その後続々と信用組合が設立されるが、これらは静岡県各地の報徳社の人々によって興されたものとされている。

(3) 報徳思想を踏まえた独自の取組み

さがみ信用金庫では、1995年に、原点を見つめて未来をひらくために、表題を「積せき小為大」とした創立70周年記念誌を発刊した。ここでは、報徳の系譜としてさがみ信用金庫の前史から振り返り、現況および未来図を掲載している。その経緯をふまえ、80周年記念誌、90周年記念誌においても表題を「積小為大」としている（図表5）。

また、2012年（平成24年）に、信用金庫の原点に立ち返って経営を行うため、報徳思想を取り入れた新中期三カ年経営計画「一円いちえん融合ゆうごう」を策定した。これは、2011年3月の東日本大震災を受け、危機的な状況に立ち向か

図表5 創立記念誌「積小為大」



(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所撮影

うにあたり、今一度原点を振り返り信用金庫の業務に邁進すべく策定したものである。施策の柱には、報徳思想の教えである「至誠」「勤労」「分度」「推譲」を記載し、それらを現在の信用金庫の課題にあてはめて、より現実に役立つように工夫している。こうした取り組みは、2015年（平成27年）に策定した新中期三カ年経営計画「つなぐ！『一元融合（いちえんゆうごう）』～地域の持続的発展のため、地域活性化に全力で取り組む～」にも反映されており、今後も地域活性化に取り組み、企業支援により地域経済の好循環につなげていく計画である。

さがみ信用金庫では二宮尊徳の節目の年などに様々な商品を提供している。1976年（昭和51年）6月に、二宮尊徳没後120年祭が小田原で催され、これを記念して当金庫では「積小為大」という報徳思想にもとづき、「報徳積金」（3年掛け50万円満期）を9月に発売した。これは、二宮尊徳とは縁もゆかり

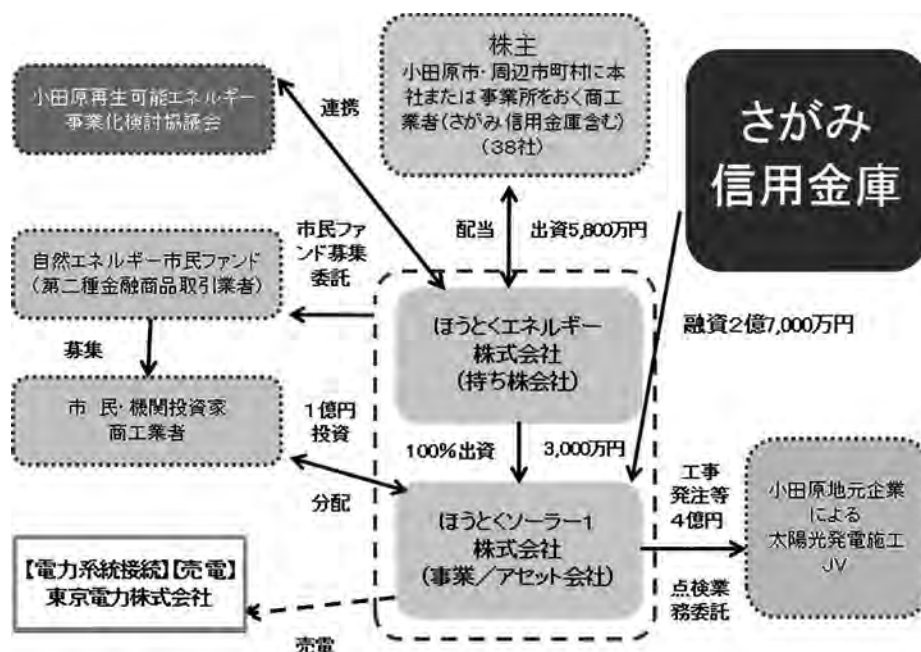
も深い当時の原理事長自らが命名したものである。

1987年（昭和62年）には、二宮尊徳生誕200年にあわせ、「尊徳百萬両積金」を発売し、NHKのニュースに取り上げられるなど話題性にも富んでいた。記録的なヒット商品となり、当金庫は念願の預金2,000億円を達成することとなった。

2006年（平成18年）には、日中来店が難しい顧客にも利用できるように「口座振替（自動引き落とし）専用」という特徴を備えた、期間限定の定期積金商品「ハイグレード積金「報徳」」を発売し、多くの顧客から好評を得た。さらに、東日本大震災後、2011年（平成23年）6月にも定期積金「報徳5」を発売している。

事業については、2012年（平成24年）12月に設立された「ほうとくエネルギー株式会社」があげられる。さがみ信用金庫は設立当初の出資会社24社の一つであり、当初の資

図表6 ほうとくエネルギー株式会社 小田原メガソーラー & 屋根貸し事業体制



(備考) 各種公表資料をもとに信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

本金は3,400万円であった（2013年（平成25年）11月に増資し、資本金5,800万円、出資会社38社）。なお、設立のきっかけは、東日本大震災が起きた際に小田原に全く人が訪れなくなったという地元の企業経営者の危機感からきている。小田原の主要産業は観光業やサービス業だが、原発事故による放射能被害や停電、観光客の激減といった状況を前に、エネルギーの一極集中に対する危うさを多くの人が感じたという。そこからエネルギーをなるべく地域で自給していこうという声上がり、小田原市も積極的に働きかけ、設立された。

さがみ信用金庫は、小田原メガソーラー & 屋根貸し事業（総事業費4億円）について、2億7,000万円を融資しており、報徳思想を活かした事業についても、協議会への参画以外にも融資や出資を通して貢献している（図表

6）。なお、ほうとくエネルギー株式会社の今後については、すでに第2期ソーラー発電所(750kw)の工事に着手しているとともに、以前実施されていた小水力発電についても事業が行えるかどうか、調査を行っている。

このように、さがみ信用金庫では、70、80、90周年記念誌のみならず、中期経営計画、定期積金、融資・出資など様々な分野について報徳思想を活用し、金庫の経営につなげている。今後についても、二宮尊徳の生誕地として報徳思想の教えを柱として、地域に役立つ信用金庫となるべく積極的に活動している。

2. 二宮金次郎の石像の普及に貢献した愛知県岡崎地区の石工業

本章では、日本各地に設置されている二宮金次郎の石像の普及に貢献した愛知県岡崎地

区の石工業について、今改めて考えてみたい。

(1) 愛知県岡崎地区の石工業の沿革

愛知県岡崎地区は香川県の庵治^{あじ}、茨城県の真壁と並んで、石の三大産地といわれる。また、技術習得のため、他の地区から後継者が送り込まれてくることもあり、加工技術の水準の高さがうかがえる。さらに、1968年(昭和43年)、駐日スウェーデン大使館から花崗岩の上に築かれた都市ウッデバラ市^(注4)を紹介され、岡崎市は姉妹都市の提携を結んでいる。

岡崎地区の石工業が発達した背景としては、①約400年前から領主や寺院の保護によって石工技術が導入され、安定した仕事があったこと、②岡崎中央部から北東方向へ広がる丘陵地から良質な石材が豊富に産出したこと、③矢作川^{やはぎ}の水運を利用して、重い石製品が江戸をはじめ遠方まで搬出することに便

図表7 愛知県岡崎地区



(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

利であったことなどがあげられる(図表7)。

岡崎石工業の歴史は古く、室町時代末期から岡崎では花崗岩の岩塊を人形などに細工し、東海道を往来する旅人に売る人々がいたという。

1590年、徳川家康が関東に転封された後、戦国武将 田中吉政が入城し、城下町整備にかかわる堀や石垣の築造に必要な石工を河内や和泉(現在の大阪府)から招くとともに、随念寺という寺が門前の土地を貸して保護した。これが岡崎地区石工業発展のルーツとされ、領主と寺院の保護の下に、江戸期を通じて30戸ほどの石屋が形成されたという。

岡崎地区は、隣接地に良質な花崗岩の産地があり、“三州みかげ”としてよく知られるようになるとともに、石切り場が異なると石質も異なるという石材の種類が多さから様々な石工品をつくることができた。江戸時代には岡崎城は徳川家康の生まれた城として縁起がよいうえに、東海道の宿場町であることから参勤交代などで岡崎の特産品が喧伝され、また、矢作川の舟運と三河湾の海運により、重い石製品を江戸その他の各地へ搬出できるといった諸条件が岡崎石工業の発展を支えたと考えられる。

明治時代においては、1877年(明治10年)に東京で開かれた「第1回内国勸業博覧会」において褒賞を受けた人物が岡崎から現われ、一躍その名を全国に知らしめた。また、日清・日露戦争後の経済発展期や第一次世界

(注)4. スウェーデンの西海岸に位置し、ヴェストラ・イエータランド県にある中核都市で、首都ストックホルムの西南西400キロ、スウェーデン第2の都市イエーテボリから車で60分の所にある。スウェーデン語でウッデは岬、バラは壁を意味する。

大戦の好況期には、生活必需品の石臼ではなく、石灯籠や神社仏閣用彫刻の需要が盛んとなったため、石工品業界は大いに沸き、業者数も増加の一途をたどった。

(2) 昭和初期にみる二宮金次郎像の普及

岡崎地区による二宮金次郎像の普及の要因についてであるが、昭和恐慌の時期に、長坂順治氏・成瀬大吉氏らが、修身教科書にある勤儉力行の二宮金次郎像を小学校に建立することで石製品の販路開拓を図ったためとされる。彼らは県外の産業博覧会に出品し、全国小学校校長会に実物を持ち込み、文部大臣をも賛助会員とした「二宮尊徳先生少年時代之像普及会」を結成するなど様々な活動を行った結果、全国の小学校に普及していったといわれる。なお、1935年（昭和10年）に岡崎信用組合（現 岡崎信用金庫）にも二宮金次郎像が寄贈されており、現在もその姿を確認することができる（図表8）。

銅像については石像よりも古く、1910年（明治43年）東京彫工会に二宮金次郎の勤勉像が出品されたのがそもそもの起源であるといわれる。その後、今日のような薪を背負いながら本を読んで歩く姿が、全国に普及するに至った原因は、1910年9月東京彫工会から明治天皇がお買い上げになって、時々表御座所に飾られていたことが、1921年（大正10年）に広く一般に明らかになったこととされる^(注5)。大正時代と戦前の昭和時代には全国に普及し

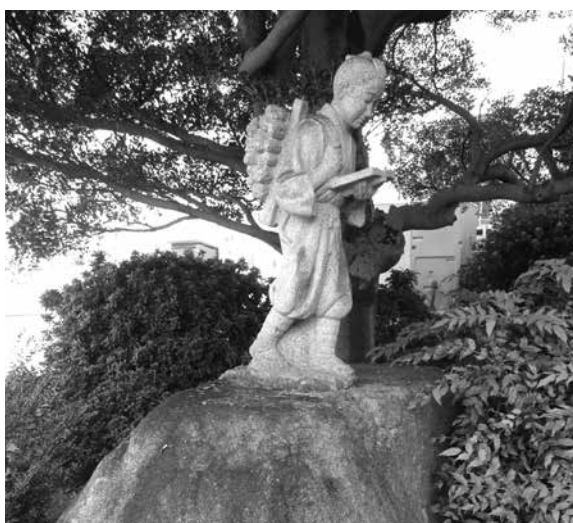
たが、太平洋戦争による銅像供出に伴い、そのほとんどが姿を消すこととなった。

二宮金次郎像の全国的な広がりによって、岡崎地区の石工業は活況を取り戻したが、第2次世界大戦勃発および空襲により、大きな被害を被った。戦後は、経済復興にあわせて戦没者慰霊塔、神前彫刻物、灯籠などの需要が順次拡大するとともに、従来は完全な手作業であった製造過程に機械化を取り入れ、岡

図表8 岡崎信用金庫本部



岡崎信用金庫本部にある二宮金次郎像（1935年（昭和10年）寄贈）



（備考）信金中央金庫 地域・中小企業研究所撮影

(注)5. 明治神宮文化館 宝物展示室「明治神宮名宝展」に「明治天皇御料 二宮金次郎像御置物」（銅像の原物）が期間限定（2016年12月10日～2017年1月29日）で展示された。

図表9 第25回（2016年）岡崎ストーンフェアの様子（右：岡崎信用金庫のブース）



（備考）信金中央金庫 地域・中小企業研究所撮影

崎地区の石工業は大きく発展した。

ところが、バブル経済の崩壊による需要の減少や中華人民共和国などからの輸入品の増加により、出荷額は減少しつつある。こうした状況に対し、産地の生き残りをかけ、1992年（平成4年）から岡崎ストーンフェアを毎年開催し、外国製品との差別化をはかるため情報発信やPR活動に努めている（図表9）。

さらに、近年注目を集めているふるさと応援寄付金（ふるさと納税）について、岡崎市の返納品に2015年から石製品も追加されており、すでに複数の実績があがっている。また、ヨーロッパなど海外で日本庭園造成の需要があり、庭園とあわせて灯籠などの注文を受けることがあるという。海外展開については輸送費など越えるべき課題が多いが、岡崎の高い技術力を活かした石製品を求める声もあることから、できうる限りの対応を図っている。

二宮金次郎像の受注については、一時期、需要が大きく落ち込んでいたものの、近年は

少しずつ回復基調にあるという。以前は、日本各地の石材小売店からの依頼にもとづき対応していたが、最近はホームページなどを通じて直接注文を受けることも増えてきており、納品先も小学校から、二宮金次郎を尊敬する教師などの個人や、事業会社創立記念の際に経営者が社内に建立するなど、時代とともに大きく変わってきているようだ。

おわりに

本稿では、さがみ信用金庫設立の経緯と報徳思想を取り入れた独自の取組みについて概観するとともに、二宮尊徳の四大高弟の一人である福住正兄の活躍と二宮金次郎像の普及につとめた愛知県岡崎地区の石工業を中心に取りまとめた。特に、江戸時代は東海道の宿場町としてにぎわった箱根地区であったが、明治時代に入ると東海道線が箱根を通らず御殿場周りで開通したため、箱根は家数が約200軒から約100軒に半減し存亡の危機にあった。そのような状況に対し、福住正兄な

どが報徳思想を活用し、箱根を復興させていくとともに、最新の技術を取り入れ、小田原馬車鉄道を敷設し、水力発電所の建設による箱根地区の電化につとめ、村おこしを先導した。さらには、福住旅館にみられるように、外国人が訪問できるように西洋の建築や料理などの海外文化を取り入れ、箱根を国際観光地にまで発展させる基礎を築いた。現代風というと、人口が半減し衰退の危機にあった地域に対し、新たな技術を導入し産業を興すとともに、地域の特色を存分に活かし、インバウンドの取入れに成功したといえる。

現在、地方創生を行うにあたり、地域にお

ける人口減少や高齢化、マイナス金利導入に伴う金利低下などにより、金融機関の経営環境は厳しさを増している。このような厳しい環境下において、5～10年後を見据えたビジネスモデルを築くにあたり、さがみ信用金庫70周年記念誌「積小為大」の副題である「原点を見つめて未来をひらく」といった考えのもと、現実を直視し各々が解決策について知恵を絞るとともに、地に足をつけた行動をひとつひとつ実行していくことが大切なのではないだろうか。

〈参考文献〉

- ・愛知県 岡崎市 ウェブサイト <http://www.city.okazaki.lg.jp/index.html>
- ・岡崎石製品工業協同組合『石とあゆんで40年』（1988年11月）
- ・岡崎信用金庫（企画・編集 株式会社おかしん総研）『調査月報7月号／No.560』（2016年6月）
- ・さがみ信用金庫『創立70周年記念誌 積小為大 原点を見つめて未来をひらく』（1996年3月）
- ・さがみ信用金庫『創立80周年記念誌 積小為大 感謝の80周年そして未来へ』（2005年11月）
- ・さがみ信用金庫『創立90周年記念誌 積小為大 地域とともに90周年一人にやさしく 街にやさしくー』（2015年11月）
- ・シュルツェ・デーリチュ著 東信協研究センター訳編『シュルツェの庶民銀行論』日本経済評論社（1993年10月）
- ・信金中金月報2015年8月増刊号『今、改めて考える信用金庫の源流「一人は万人のために、万人は一人のために」』（2015年8月）
- ・信金中金月報2016年2月増刊号『今、改めて考える信用金庫の源流「協同組織金融機関の祖 シュルツェ・デーリチュ（ドイツ）について」』（2016年2月）
- ・信金中金月報2016年8月増刊号『今、改めて考える信用金庫の源流「二宮尊徳がつくりあげた報徳思想の実践～掛川信用金庫と報徳二宮神社～」』（2016年8月）
- ・友貞安太郎『ロッチデイル物語ー近代協同組合運動の起こりと原則の成り立ちー』コープ出版（1994年4月）
- ・内閣府 広報「ぼうさい」（No.39）pp20-21（2007年5月）
http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/pdf/kouhou039_20-21.pdf
- ・箱根町立郷土資料館『国重要文化財指定記念 福住旅館金泉楼・萬翠楼ー明治の息吹を今に伝える建築と書画』（2003年9月）
- ・ほうとくエネルギー株式会社ウェブサイト <https://www.houtoku-energy.com/>
- ・報徳博物館ウェブサイト <http://www.hotoku.or.jp/>
- ・三戸岡道夫『二宮金次郎の一生』栄光出版社（2002年5月）
- ・村本孜『信用金庫論ー制度論としての整理』きんざい（2015年2月）
- ・明治神宮宝物殿ウェブサイト <http://www.meijijingu.or.jp/homotsuden/index.html>